

1991年5月。私はバチカン市国で当時のローマ法王、ヨハネ・パウロ2世の祭服のサイズを測っていた。法王に献上する博多織の祭服を作るためだ。着ていただけるかどうか半信半疑のまま、帰国して製作に取りかかった。

実はその7年前、私は博多織工業組合から、伝統技術を生かしたドレスづくりができないかと相談を受けていた。和装の減少とともに着物帯の産地は衰退するばかり。世界を知れば知るほど日本の着物の伝統美を大切にしたいと願っていた私は、その一方で高級ドレス

の素材が日本製でないことに強いコンプレックスを抱いていた。伝統技術を洋装に生かせれば産地の活性化や技術の継承にもつながる。そう考えて喜んで依頼を引き受けることにした。

数年の試行錯誤を経て、博多織のシルクのドレス生地を完成。その出来栄は優美な仏リヨンの絹織物にも匹敵するほどで、日本の伝統技術のすばらしさを再認識した。同時に、これを何とか世界にアピールできないかと考えた。

そこでひらめいたのが、敬愛するローマ法王への祭服の献上だった。キリスト



ローマ法王のロザリオ

手かなかなあたなた法王の  
手ロザリオを出すを思い

教の祭礼と博多織の取り合わせは和と洋のすばらしい融合になる。さっそく法王庁にかけあつて承諾をもらい、

## 博多織で作った祭服の返礼に

計画を進めた。ご高齢のため重たい衣装は着られないという。軽さと華やかさを両立させるのは難しく、純金の糸を織り込むなど手間のかかる作業で、完成までに2年近くを要した。

法王に再会し、完成した祭服を贈呈したのは93年3月。故国ポーランドの国花パンジーを刺繍であしらったデザインを法王はとても気に入ってくださり、私の手をにぎって、なんと日本語で「神に感謝」と声を掛けてくださった。

法王は翌月、復活祭に集まる大勢の信者の前でこの祭服をお召しになった。その連絡を受け、作業に携わった博多織の方々と共に喜び、互いの労をねぎらった。

このロザリオは献上の折、法王が手ずから返礼としてくださったものだ。信者ではないので特別な意味はよくわからない。でもこれを見るたび、まるで神の祝福とも思えた、あの大きくて包み込むような法王のあたたかな手を思い出す。